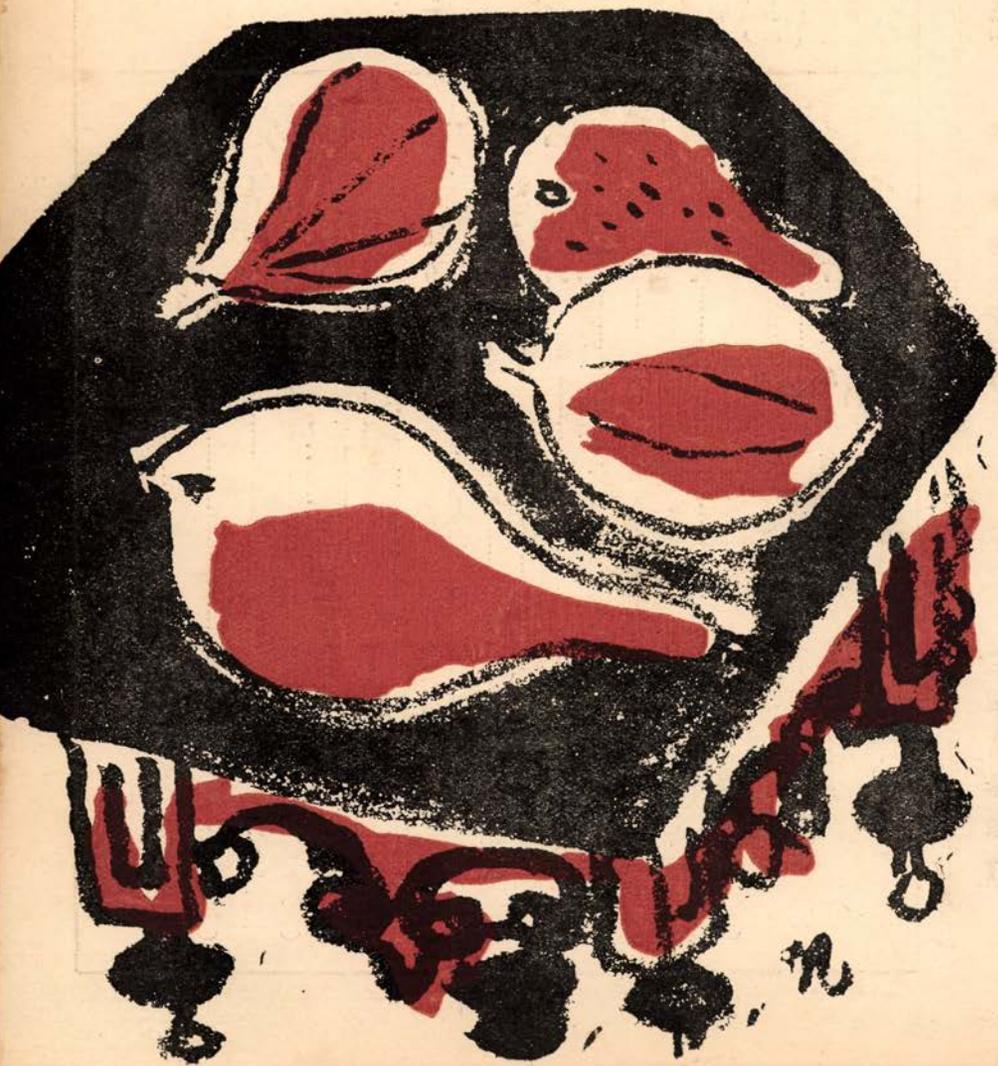


郎路生麻·幹主

川柳雜誌



大正十五年三月一日發行
大正十五年十月一日發行
大正十五年十一月一日發行

川柳雜誌 第三卷拾月號

川柳雜誌社發行

◆本社十月例会

◇日時 三日午後六時より

◇場所 大阪市南区清水町
停留場西入

端の坊

◇兼題 「米」三句

◇會費 參拾錢

初心者の來會を歓迎す

◆遅日莊柳談會

◇日時 十日午後一時より十時迄

◇場所 阪神沿線鳴尾 麻生路那方

◇批評吟 雜吟持參のこと

◇會費 不要

◆寫眞をのぞむ

私は川柳家の寫眞を蒐めてゐるので
が、眞面目なでも、風變りなでも
赤ん坊の頃でも結構ですからお患み
下さいませんか、何れ何かの機會で發
表したいとも思つてゐます。なるべく
寫した場所、その時の年齢や、同時に
寫つてゐられる方々の説明を添はてゐ
ただきたいものです。大分珍らしいの
が蒐つてゐます。吟行などに寫したも
のなどは飽かすにがめられます殊に
少年の頃の寫眞にはその人の面影がし
のばれて懐しく思はれます。(路那)

川柳雜誌 第三卷第拾號目次

川柳南國の街

川柳大學の句

穀を葬る

大けなる(漫書)

誹風柳樽全集の誤謬に就いて

柳珍堂忌

試み

新戎橋より

近作柳樽

柳風阿呆陀羅經

唐柳短解

漫談と雜詠

募集句

枕許

商家人

家台

粒々集

川柳塔

編輯後記

麻生路郎(一)

竹馬居主人(三)

井上刀三(三)

柴谷柴舟(三)

西原柳雨(七)

橋本二柳子記(六)

木村半文錢(三)

萬よし生(三)

飯山生(三)

麻生路郎選(四)

きやうごう生(二)

蛭子省(二一八)

林田馬行(四)

前田雀郎選(元)

相元紋太選(元)

駒井美の作選(三)

森田輝翠共選(三)

太田朝陽美選(三)

紋太久流美(三)

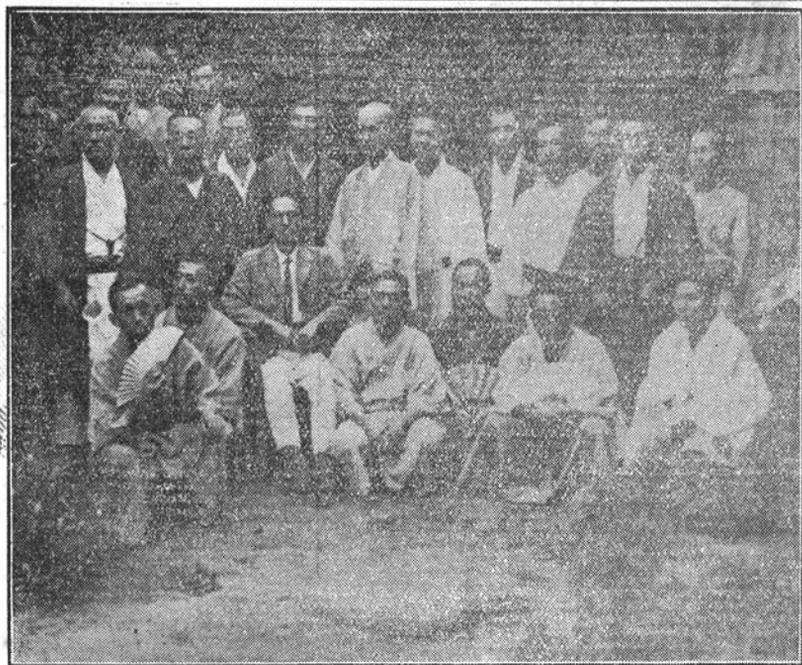
乃よし革郎(三)

飯山眠聲松郎(三)

助六柳路(三)

表紙繪

小出楯重



川柳脚南國の街 (上)

麻生路郎

堀楓林君の主宰してゐる南紀田邊の柳陰社から招かれて急遽眞夏の旅に出た。大阪を出たのが午前十一時の和歌山ゆきの急行。途中濱寺で下車した。濱寺は全く久しぶりである。松原をぬけて南海食堂に入る。同人の朝陽が、最近この食堂の主任に轉じた事を知らして来たからである。濱寺附近には南海の重役たちが居を構へてゐて、何時さなく君臨するらしいから、この主任も決して樂ではなからう。

暑いはず上役攻めにあふてゐる

朝陽を慰めるのにこの一句をのこし、十分間はざ談笑してそこを辭し濱寺郵便局から楓林君へあて、四時の船に乗る旨を打電して置いた。

◇

和歌山ゆき急行の中で、誰も彼も、暑さにゆけて、ゐねむつてゐる人が多い。私はバスケツトから「近作柳橋」の選句の残りを出して、和歌山驛につくまで選句をば續けたが、なかく片づかない。今日でもう四日目である。こゝで新和歌の浦ゆきの電車に乗り換へた。電車は市中を喘ぎ

ながら走つた。和歌山城のほごりに出た。こゝは會遊の地である。

蓮が咲いてゐるなと思ふ和歌山市この城のすぐ袂には川柳家の秋月久樂君がゐるが久しくその句に接しない車中に親子八人連れの旅客がゐる。夫君はあまり背の高くない、でつぷりさ太つた物に頓着しない古句のまじり／＼の子の出来るやうな男である。妻君は私のすぐ隣に席を占めて二つ位の女の子を抱いてゐた。共に浴衣がけの輕装である。十二三の女の子を頭に六人の子供を連れての夏の旅は決して樂なものではなからう。葡萄やバナ、を分ち與へるさまを見てゐてさへも、母親の勞苦がしのばれる。

人ごみでなし樹子八人連れもありふざ見れば子故の母にあせもが出風よ吹け抱いてゐる子へ歩く子へ電車はさらに／＼走る。あちこちの軒先に黒山のやうに人だかりがしてゐる。新聞舖和中のための人ばかり目下甲子園で開催されてゐる全國中

等學校野球大會の人氣が、この地でも正に沸騰點に達してゐることを知つた出がけに聞けた鯨波の聲を思ひ出して微笑を禁じ得なかつた。

◇ 新和歌に着いたのは二時すぎだつたまだ四時までは、かなりの時間があつたので、一寸した食堂を見つげ簡單な食事をした、めた。煽風機が生あたゝかい風を送つて今日の暑さを證據立てゝゐる。食事をすませてから商船會社の待合室へ出かけた。田邊ゆきの急行船だつたら六時半ださ聞ひてもう一度その事を知らすためにぶら／＼歩いて和歌の浦の郵便局まで引返した。兎に角、そのこゝを再び打電しておいて、再び新和歌の待合室へ戻つたが、なか／＼時間が経たぬ。

私は、こゝでも「近作柳樽」を出して、選の殘りに眼を通した。海越つてゆく父となり子を思ふ正直なこゝろになつて船をまち私は、たそがれてゆく新和歌の風光

に心ゆくばかり眺め入つた。急行船は琉球丸だつた。僅に七百三十噸。

◇ 日の岬を出てから船はかなり揺れたかねてから南紀の海の荒れることを聞かされてゐたので、さほぎ閉口もしなかつた。上甲板に出て見た。浪はあれにあって、雨さへ交た風が吹きまくつてゐる。

十時半、船は田邊港に入つた。雨が止んで俄に海岸が明るくなつた。私を歓迎してゐるかのやうに。

之は、あさで知つた事であるが、バツミ海岸が明るくなつたのも道理その時まで停電だつたのが、琉球丸の入港碇泊と同時に點火されたのであつたこゝで下船の人達と共に、本船を降つて艇に乗り移つてゐるころへ、更に一艘の和船が横づけにされた。柳蔭社の人達がわざ／＼の出迎であつた。知らぬ港についた旅人にまつてそれは嬉しさの極みであつた。私は呼ばれるまゝに、その船に乗り移

つた。神戸で逢つた楓林君の懐かしい顔が宿の迎への提灯の灯に浮かみ出て見へた。その外四五の人たちの黒い姿いづれ陸にあがつてから挨拶をするこゝにして黙したまふ岸へ向けて漕いだ旅人よ海の黒さを何んぞ見る

柳友に、案内せられて田邊港の海岸扇ヶ濱の五明樓に入つた。出迎へられた、愚圖六、茶利吉、藥袋、木の子、明荷、左馬、楓林の諸君のうちで相識の人云へば僅に楓林君だけであつた。約一時間ほき飲みかつ語つて柳友達は去つた。私はたゞひこりこなつた。暫く荒れる浪の音を聞いてゐるたが、やがて蚊帳のなかに横はつた。まだ、船のなかにゐる心地がする。五明樓また搖れてゐる氣で泊まりの句を得た、宿は實に靜かだつた。私のためには、ほんきに相應しい宿だつた。柳友の厚意を謝しながら眠りに落ちた。

翌朝、楓林、愚圖六、素齋、左馬の四君の東道で名所見物がてら自動車上から明日の川柳講演の宣傳紙數千枚をバラ撒いた。辻々には張り札かされてその歓迎ぶりの大げさなのに驚かされた。先づ第一に鬮神社へ寶物拜觀御靈社を見物し、辨慶の松を横に見ながら田邊の中心地を走つて牛の鼻にゆき海岸に沿ふて目良についた。元島遊園地を前に望みながら歸路千田川の墓を横にして五明樓にかへつた。

午後三時から再び自動車で、陸路白濱温泉に向つた。一行は楓林、愚圖六、明荷、天五、左馬の諸君と私の六人である。扇ヶ濱から磯間、神子の濱を過ぎ六本鳥居に名のある鬼橋岩、獅子舞岩を眺めながり文里港に向ひ、梅の名所を聞く新庄村から、朝來、富田を経て、田邊港を遠く眺め、綱不知を経て白濱の白濱館に入つた。家温泉にひたつてから、徒歩湯崎鉛山に向つた。先の湯から引きかへして

再び白濱館に入つた。

白濱館席上吟「母」

拙い兒も同じ氣分に母も
老いた母四十男を不安がり
母がはり祖母にをるる歳に
母なる身に日日の身を
いつそも憎らし氣の母の文
句評後小宴、雅帖その他に惡筆をのこした。愚圖六氏が寫生した仲居のおしけさんの後姿に、「しら、濱男ばかり見てありぬ」を識し、奴さんの半折に「これだけの男を見せてかへるなり」と題して筆を投じた。その夜十時ごろ海路五明樓に歸る。
女蚊帳をつりぬ浪の音強し

主 催 路郎先生歡迎句會

- 八月廿日 於龍泉寺
(前列向つて右より) 廣島寄句坊、石井
紳人、瀧川の丸、津守乙音、麻生路郎
先生、堀楓林、眞砂明荷(中列)橋本山
彦、野呂蒼生坊、辻左馬、橋本(弟)木下
木の子、原釋迦也、藤堂雲内、原愚圖六
雜質素齋、鈴木茶利吉、福富美琴(後
列)鈴木藥袋、那須朋打、那須青磁
(辻左馬撮影)

酔つてゐる父を子供に見逃さず
 集金が別なところからつりを出し
 戀仲のさつちも野暮な親をもち
 悪友がても仰山にほめてくれ
 やゝ人がさぎれ賣出しほつこする
 格段の相違誘ひの手にかゝり
 呼びさめた自動車少しいためて
 袂から落ちたを息子かくすなり

近作柳樽の作家

どの選にしても、おろそかな選ばしなかつても
 りであるが、殊に近作柳樽の選には出来るだ
 けの力をそいで来たので、その作家達の進
 境が、どれだけ私をよるこぼせるかわからな
 い。一、二ヶ月間の近作柳樽の作家では廣
 島の露斗君、山梨の天花君、大阪の眠聲君、屏
 三呂君、山雨樓君、靜雲君、平壤の柳也君、神
 戸の隨帖君などが、さみに進境振りを示めし
 てゐる。眠聲君は九月號を最後として川柳塔
 に移つて塔中の花形たらんとしてゐる。次い
 で神戸の嶺月君、一狂君、志郎君、螢ヶ池の其
 象君、杏三君、大阪の開路君、悟郎君、鮎美君、
 冷笑君、史郎君、靈翠君、旭川の志貴南君、豊

高知	濁水	朝顔の花へ十時がすぎてる	同	柳一
同	同	洋装に四角な顔の多すぎる	同	同
大阪	汀柳	物足らぬ氣持へ水を持つて来る	丸龜	袖蘭坊
同	同	問題にならぬさ植木屋水を撒き	大阪	不減
小樽	吐松子	暑くさも女房の瓜のみみかけん	粉濱	光路
同	同	上敷を又こがして二階借	大阪	枝呂
大阪	椿薫	なぜ見ぬぬかさも言ひたい心なり	東京	千代二
同	同	眠れぬ夜電車が絶たなき思ひ	鶴ノ莊	普天

中の案山子君、丸龜の袖蘭坊君、東京の千代
 二君。京都の文鏡君、等の多士濟々がある。こ
 れ等の作家のうちにも一進一退はある。旭川
 の志貴南君の如きはかつては、非常な秀句を
 吐いて近作柳樽中異彩を放つてゐた。時代も
 あつた。

右にあげた作家達で創刊號の近作柳樽にそ
 の名を列べてゐるのは僅に悟郎、眠聲の兩君
 の外にはない。創刊號で、ふるつてゐる北海
 道の句樂君は柳壇から影を没してしまつた
 松郎君は同人となつて川柳塔の第一人者とな
 つてゐる。夢路、幽香、義矢滿の諸君は更に
 句を見せなくなつた。金澤の松花君は龍二と
 號して「氷原」や「影像」に於つて一層の佳句

を見せてゐる。創刊號の雜吟欄には金澤の久
 流美氏なども句を寄せてゐて一層の興趣を
 覺はしめられる。

その後いろんな作家によつて近作柳樽は賑
 つたが作家の變遷、句風の變遷等について逐
 號その跡を回顧すれば感慨を深からしめる
 ものがある。それ等作家達の代表作をかきな
 らべて見ても面白いとは思ふがもう餘白が
 ない。

私は今、筆を擱くにあつて、今後の近作柳
 樽をますます光輝あらしめるために、現在活
 躍してゐる作家達は勿論將來大いに活躍を
 期する作家達の一層の精進を切望してやま
 ない。(路郎生)

『誹風柳樽全集』の誤謬に就て

西原柳雨

興文社内、日本名著全集刊行會の依頼により、誹風柳樽初編より第三十編迄の校正を引受け、唾手一番立きころに遣附ける積りで着手して見た所が、さつこいさうは問屋で卸さず、存外の難事業に少からず手占溜つた譯である。先づ國書刊行會發行の『誹風柳樽全集』を底本とし、夫に花久版『誹風柳多留』の原本を參考しして訂正増除をなすことにしたのであるが、加筆を要する點が非常に澤山あるのうんざりした。幸に先輩岡田博士が克明に調査して『誹風柳樽に就て』或は『寛政改革』柳樽の改版と題する著述に於て詳説せられてゐるので、此度の事業の上にごれ丈の助けを得たかは殆ど言語に絶する次第である。夫等のことは本書の端書に詳記する種であるが、茲に誤字、誤植、假名遣、或は不正なる當字等につき博士外先輩諸氏によつて既に指摘せられたもの外（ミ思ふけれども私の見落しもあるかも知れぬ）に明かに誤解に基ける不當の漢字或は誤植等のため全然意味をなさざるもの若干を抜載して該書所持の士の參考に供したいと思ふ。尤も解り切つた誤植………少く

も川柳家は太抵知つてゐる句、若くは大凡常識で解る程度の誤植假へば「おそがれに出て行く男尻知らず」おそがれはたそがれ「腰元は見越の松に逃けのこり」の腰元は腰帶の誤り等の如きは殆んど枚舉に遑なき程あるので此稿には省略しておく。姑のつむじは尻に成て知れ 初編、十頁上段
尻は尼の誤り、尻では何のこさかさつぱり解らぬ。 二、二三、下段
かりやからごうこの僧の笑つて出 二、四八、下段

かりやはかはや即ち「町から江湖の僧の笑つて出」させねば意味をなさぬ、雪隠禪即ち脱糞しながら沈思默考、飄然難問を悟了し、快心の微笑を洩らして出て来るならん。 三、四八、下段

ばかされたやうに日用は二本さし 三、四八、下段
日用では普通ニチヨウミしか訓めぬ。是は勿論日傭の誤りにて一日何程の賃錢にて傭うた「出来合の武士賣切れる松の内（安永）」「袴は貸さう二百で来てくりやれ」（天明）なぎの類句である。

朝路から戻り大根のこもを取り 三、四一、下段
寺の朝の勤行に參るこもアサジミ謂ふに聞くと、ぎんな字を

用ゐるかを知らぬ。少くも朝路ではあるまいと思ふ御垂示を仰ぐ。

自身番まづ風なぎのくづを買ひ 五、八四、下段
まづはまづ即ち松の誤り、松風云ふ菓子のあるこゝの人の知る通りである。

音羽こも出ようご後妻けなるがり 五、八五、下段
是なきは甚たしき當字述にて、後妻は御宰である。雑司ヶ谷參籠の殿女に隨行したる御宰が羨ましがつて音羽町の賣女でも買はうと云つたこなるが、雑司ヶ谷に於ける殿女の秘行に就ては鮮著『川柳江戸歌舞伎』に疑問を挿んで置いたまふ今以て大方の垂示にも接せぬ。

せわしなくつゞいて座頭横に切れ 六、九六、上段
特につゞいて濁音まで添へてあるも續いてでは何の事かさつぱり解らぬ、是はせはしなくつゞいて、即ち杖の先にて忙がしく大地を突いての意であらう。

五條坂けさい七兵衛せんぎ也 八、一四五、下段
是は勿論植字係の誤りであらうが、けさいでは全然意味をなさぬ。けいご即ち警動である。

是むちう作だこ起す花の山 八、一四七、下段
作だこ態々濁音迄附してあるが是は『是夢中作左こ起す花の山』の誤植である。

鎌倉は度々召人の舞つた所 九、一五三、下段
召人は囚人を書いた方が一般にはよく解ると思ふ、而してメシ

ウドに假名を振つて置けば猶更結構と思ふ。妾なきを召人と呼ぶ趣が言海にも掲げてあるけれども、茲では妾に限らぬ方よろしく、囚人即ち捕はれ人にて靜御前だの主馬頼久なきを指せるものかと思ふ。此句に就ては猶各位の御高説を聞かまほしく存する。

かみゆひのすいで付けそう樽ひろひ 九、一六一、下段
中七が間違つた爲に全く譯の解らぬ句になつて仕舞つた『髮結の吸付けて剃る樽拾ひ』本字で書けば一點容疑の餘地なき平句である。吸付けては無論煙草にて、樽拾ひぐらるは馬鹿にして脚煙管なきで剃つてやるこの義であらう。

あだのある子の母親のうつくしさ 九、一六一、上段
私は私の控本に最初あだ即ち仇として書込んで置いたところ、後某々氏等の報告する所によれば、原本的にあだではなくあざがある。されば痣なるべく、赤子の髻邊に多く紫斑があるのは良人の制慾を保持するには餘りに妊婦が美し過ぎたに、多少破禮氣味に解釋せられたのを見て、さうも妙だとは思つたれど、原本明にあざがあるさあつてはぐうの音も出せず不承く服従してゐたのであるが、此刊行本には明にあだがある。是はこも思つて二種の原本を調べて見たれば矢張判然とあだがある。尤異本によりていろいろの字を用ゐてあるこもあれば、或はあざである本があるかも知れぬ。併しあざあだこ二つの中よりらからを取れ云はるゝなら、私は躊躇なく仇の方を取りたい

のである。美人の妻を持つたのが戀の仇となりて殺され、其子が親の敵を打ちに出立するといふことは、芝居や稗史などにもよくある筋にて、仇のある母親の美しい理由がはつきり解ると思ふ。猶各位の御研究を仰ぐ。

生島のある評判記 茶人もち

序ながら此句も最初生島として江戸歌舞伎に載せて置いたころ原本には生島は牛醉とあると聞いて、大席章に原稿から殺抹した、所が後にてやつぱり生島と聞いて大に迷つたのであるが柳橋第三十一編には正に判然と生島とある、併し或る異本に牛醉とあるかも知れぬ。

政宗ではなはだもめるかたみわけ

一〇、一七〇、上段

正宗をわらづこにして江戸へ出し

一一、一九八、上段

此二句の甲の政宗は正宗の、乙の正宗は政宗の誤りにてはなきかと思ふ。

まだ動く瓦へ奉書の紙をかけ

一〇、一七八、上段

瓦の字少しく讀みにくいけれども、原本尾の字であらう。尾でなくては句義をなさぬ。

取勝だべらほうめが猪牙ゆれる

一〇、一八二、下段

原本取からとあるのを取勝としたのは全く校正者の考へ違ひにて、これは取舵であらう、猪牙と他の舟が行違つた際に取舵と面舵と間違へたのを船子が罵倒する場合であらう。

岡崎をくらやみでひくおしやう達

一一、一八五、下段

假名が多過ぎて非常に讀みにくい『岡崎を暗闇で弾く御上達』とした方が紛れがないと思ふ、おしやう達では動もすれば和尙達と間違易い、和尙様方が暗い處で岡崎女郎衆はよい女郎衆、イヤ、チンテンでは句にはなるまい。

いるまねをいたしましたご手引いひ

一一、一八六、上段

代脈が来たでいさら引つこませ

一一、一九〇、下段

何の事かさつぱり解らぬ。解らぬ筈たいまさらはいまさかの間違、今坂は船肝の名である、醫者に出す筈で盆にのせて用意して居た處へ代診生が来たので、引込ませたといふ迄のこと。せんひやうはうすき契にぶら下がり

一一、一九一、下段

唐人の寝言よりはまだ解らぬ『前表は薄さちきりにぶらさがり』即ち仙臺高尾をいへる句、ちきりは秤秤即ち大な秤である。契なき無意義の漢字を當てたために、ちんぶんかんとなつて仕舞つたのである。

すいながら跡をひねるはけびたもの

一一、一九七、下段

假名遣や當字遣を川柳に責むるは野暮だといふ説には或點までは双手贅意を表してゐる、けれども攻めて校訂する時には解る程度までには改めておく必要があらうと思ふ。全く想像なしに此句を解せんしたらさうであらう。若し是を『吸ひながら後をひねるはけびたもの』としたら、煙草を喫んでゐる場合であるといふことが一目直に解るではないか。(未完)

漫大けなる

柴谷柴舟

女給「無茶しなはんないナ。此處の人おこりはりまつせ。頼みやさかい。あーさん



んは酔はるご

無茶や」

答「ナニが

無茶や。こん

な小さな家や

さかい同情し

て肥したつて

んね。今に三

階になり四階

になり五階六階七階八階……堂ビルより大けのビルディングにしたろと思てんね
ゲツブ……お前さこへ来る度んびに早よ大けなるやう肥したる。ここのやつ喜び
よんで」女給「あほらしいホ、……」

新戎橋より

万よし生

失敗禮讚の日本人

落語家曰く「神代の昔より女ならでは夜の明けぬ國歌入曰く「言の葉に惠まれし國、東湖曰く「天氣正大氣皆神州に集る」鳴鶴曰く「元日や一糸の天子富士の山」一茶曰く「日本に於て嬉し下駄の音」鈍平曰く「日本に於て嬉し下駄の音」劍花坊曰く「咳一つ聞ぬ中を天皇旗」國勢調査曰く「毎年八十七萬を増す」大藏省曰く「入超何億何千萬よし思ふに日本人は、これ失敗禮讚の民なり乞ふ聊かこれを論ぜん
判官を慕ふて頼朝を敬はざるは日本人なり鎌倉政府建設の勞は報あられし。平氏討伐の功は報あられざるが爲なり、豊公を崇拜して徳公を疎んずるは日本人なり、子孫の盛衰雲泥の跡を見るがためなり
燃の出づるも枯るも同じ野邊の草
いづれか秋に會はで果つべき
佛御前は榮華の頂上に既に己に無常觀の典義を把持したり
去年今夜侍「清涼」秋思詩篇獨斷腸
恩賜御衣今在此 捧持毎日拜「餘香」
菅公は失脚の谷底に於て、尙遺般の餘裕を持ちしにあらすや 日本史上に汝の好む名を擧げよ
源家に於ては判官なり、實朝なり、爲朝なり、平氏に於ては重盛なり、教盛なり、教經なり、軍人にしては楠公父子なり上杉謙信なり乃木希典なり詩人にしては菅公なり、山陽なり一茶なり、子規なり六塵坊なり、志士には

近頃田地のそばに赤い屋根の箱みたいな家が出来ました。田や畑に肥をやつて居る時
 なご大業にハンカチで鼻を被つて小さな體を孔雀の様に着かざつて通るので野嬢達の
 反感をかつて居ました。今日しもヨウソチミやらん袋の様なものを着てフェルトをつ



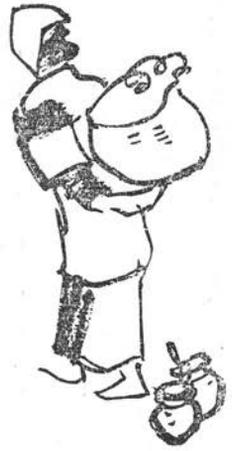
へつて見るに二見黒土の様になつた肥壺から其袋の女が首だけ出して居ました。又大根
 でも買つてもらはんならんで村郎は行つて世話して居ます。野嬢達は遠くから心
 地よけに『奥様も肥がきいて、ちつこは大きなつしやるべエ』ハハハハ………』

かけて収獲
 で働いてる
 そばをシナ
 リ〜ミ散歩
 してゐまし
 た。
 「アツ」ミ云
 ふ聲でふりか

松陰あり龍馬あり、彦九郎あり沖貞介あり、
 政治家には義勇あり白石あり、南州あり博文
 あり、見來ればこの末路の悲惨と逆境の心事
 さによつて後世の人心を驚くものにして、彼
 れ等はこの失敗挫折なりせば吾等の思慕
 の熱情は必ずや別箇の人物に禮讃の征矢を
 浴びせしなるべし。けにや日本國民は失敗禮
 讃の民ならずや」

表面成功者に叩頭して、内心失敗者を禮讃す
 るは日本人なり、代議士も三度候補に立てば
 遂に當選するが常なり、岩下清周も十年默す
 れば市民の恩人として遇せらる、鼠小僧も義
 賊として線香の跡は絶えず放火犯お七は戀
 愛の殿堂に祭られ、密次武郎は大正の人格者
 となる、五寸釘寅吉、大西性次郎、大杉榮も將
 來流行の祭神ともなるべきか

昔熊襲鼻が皇子の暗殺に會ひ「日本武」の尊
 稱を呈して笑ひ乍ら眠せると羅馬の「シーザ
 ー」大帝が「アールマス」に切らる、や「汝亦
 われを切るか」と怨聲を發して絶命せると比
 較すれば彼我の血汐の運行の差違を認め得
 られん、奈翁の「ゴルシカ」島終焉の日記は英
 國を怨み世間を呪ひ奈翁もある人に似合
 め醜態を演じたるを、彼の藤房爲の敗殘の身
 安房の小浜に隠れて一部の 參考書もなくし
 て史論太平記を完成せる餘 裕を比較すれば
 日本人の窮迫の極致に於ける悠々たる 天
 地を吾れ乍ら頼もしき限りを感すべきなり」
 英雄頭を廻せば即ち神仙、末梢神室にのみい
 らくしたる 川柳家某々氏を戒むる事然り
 生るゝも死ぬも本來空つぽう



殻を葬る

井上 刀三

私の書く物や、私の川柳に、興味乃至共鳴點を見出して呉れる人なんか、恐らくありつこないな。所謂、忍辱の悲しい諦めを餘儀なくされてゐるが、二三ヶ月雜誌なごに顔を出さない故か、昨今君の書く物は素的だとか、共鳴してゐるさか、頼りない私の作品を捉へては勝手な力持ちをする人のある事を始めて知つた。勿論私でも人間である以上、假令それが通り一遍の御世辭であるにもせよ自分の物を褒めて貰ふ事は矢張り氣持がよい。滿更悪い氣持はしない。けれども肝心こちらで氣に病んでゐるやうな作品を擲へて、やれ藝術的だとかなんさかださか厚化粧的な秋波を送られたりなごするさ全く辟易して丁ふごころか半温かい悪感を覺ゆる。恰度一撃を喰はずべく振り上げた拳がはからずも相手の血潮を充分吸つた蚊を叩き潰した様な結果で、それに『ごうもありがごう』なんて云はれた日には、全く其場の應酬に困つて了ふだらう。それと同じ事だと思ふ。人

には折角褒めさしておいて逆掩を喰はずなご敢て私の好む所ではない。故六厘坊が古句その儘を新聞柳壇に投じて、人のいゝ選者を啞然たらしめ、窃に快哉を叫んだなごは一層大規模の悪戯で寧ろ其稚氣變すべきだが選者が半感激して慎重に扱いた自分自身の句を『ありや君癡直しさ』なごさ惡黨振つて得意がるなご聞いても忌々しい事だ。けれども自分の糞を寶石たなご、勝手に決めて騒がれる事は餘からず迷惑である。しかしこんな事を思つてゐるご愈々不用意な作品、出鱈目な川柳は發表したくない。語彙辭典から失敬したつぎだらけの文章なんか死んでも書けない。

誰一人だつて相手にして呉れなくつてもいい。私は私の川柳を作らう。それがもし誰かによつて認められたならばこんな嬉し事は無い。その時こそ本當の嬉しさが味はれるのだ。

私は今迄唯あまりにも作句的マナーを續けて来た。迷夢一度醒るご、歩んで來た自分の淺ましい姿が意外に恐ろし

い。機嫌のよい時は、調子に乗つて虚勢を張つたり、きはぎい洒落を云つたり、警句百出さても痛快磊落な人間だが、その實私程卑屈な、陰鬱な、狡猾な男は無いだらう。莞爾としてチツプを切つてゐても内心窃に自責後悔してゐるさ云ふ風の間人なのだ。

この卑屈な私の醜さが、今迄幾何程柳界を毒し知友を禍せしめたか。Aに對してはA讚美者であり、Bに向へば忽ちBの讚美者となる、寔に厄介な代物、性來兎角縮りのない人間なのか私は實際Aに會へばAが好もしく、Bに向へばBが好きになる朝のA讚美者は夕には忽然Aへの反逆者となるさ僕の場合さう珍らしい事ではない。この忌はしき癖を早く根治せなければさまで人氣のない私なき、誰も相手にしてくれなくなるだらう何れにしてもつさ氣概のある人間になりたい、今迄私が柳界に残した罪業の多くはこの呪ふ可き性格病が大いに原因してゐるのだらうと思ふ。

生意氣な見得を切る癖に、私程又卑屈な人間は無いだらう。

眞面目な同人諸君の中に交はつて、顯出の僕なきが、かりそめにも、出姿整る幕でない筈を、實際今迄私は面憎いまでのタイルントであつた。その癖肝心の義務と責任とにかなるさ洒々さとして一向無頓着な男なのだ。その往昔、碩學を前に堂々論語を講じた大馬鹿者は、敢て貝原益軒のエピソードのみではない

温厚な君子達が微笑の中に、ありつたけの啾啾を切つた過去の自分……穴があつたら消れてなくなりたい。

兎も角今迄の私は凡ての點に於てなつてなかつた。僕に若し人格さ云ふものがありせば、それは精緻な顯微鏡下にさらけ出された奇怪なしかもだらしない、眼も鼻も、個性も失くした一種のバクテリアに過ぎなかつたであらう。にも拘らず私は川柳家として、案外幸福な道程を歩んで來た。今日では貧窮乍らも川柳家としての末席を汚してゐる。勿論これは、先輩諸氏の指導と鞭撻の賜であらねばならない。

私は路郎氏の川柳を味はつて始めて川柳の尊さを知つた。川柳に一身を捧して一生を捧に振るの敢て徒爾でないばかりでなく、寧ろ痛快な事ださ知つた。路郎氏には本當に教へられつゝある。氏の愛寵を一身に享けて、私は勿體ない程悉なく培育されて來た。曾て私は大杉榮の自叙傳を熟讀した。あの雄辯な筆致に感涙を禁じ得なかつたと同時にすつかり大杉榮が好きになつて了つた。机上の卓論なりとして從來耳を藉さなかつた。社會主義にまで共鳴して了つた。私は今此處で路郎氏と彼を比較しようとするのではない。けれども路郎氏の場合もこれと同じ事である。路郎氏の風手に接するさ或る敬虔な懐かしさがこみ上げて來る。

思想生活の成熟を示す、あの沈痛な面持ち、情熱的なあの口許、

利に閃く玲瓏たる瞳は云ひ難い一種の嚴肅さを表すが、一度胸襟を開けば人なつくこなる眼差し、容貌から受ける涙ぐましい程の優待さ、私がおもし大杉榮を知つてゐたならば決つて兩者の間に絶く難い共鳴點を見出す事が出来たであらう。さもなく路郎氏は僕にまつて長い航海に頼るべき羅針盤であり、又恐る可き魅力である。醜女の深情でも云ふべきか、私は路郎氏にぞつこん參つてゐる。氏にすれば必ず厭ふ可き執着であるかも知れないが。

松郎、馬行光太樓君は、私の川柳生活はもとより、私の青春時代に特筆すべき多くの内容で、交渉を持つてゐる人達である。『大大阪』の同人に拾つて貰つた當時、私の瞳に、この三君がされ丈けの華やかさを以て偉大に映じた事ぞ。僕も早くこれ等の人の様に偉くならなければならぬと思はざるを得なかつた。同時に、可笑しい程興奮したものだつた。爾來父を重ねる三年、不幸にして光太樓君のみは、この幽樂を後に、われわれの眼界からおさらばをしてしまつたが、僕の所謂哀切きはまりなき『青春悲話』の秘密の鍵を同君に委ねた事を悔いしない。寧ろ愉快に思つてゐる。

突如出でて漫然五七五の仲間へ投じた私に、作家としての虎の巻柳樽あるを教へて呉れたのも、又人情を解せざる硬骨野暮漢の私が艶々極まりなき浪花情緒の如何なるかを知り、紅燈緑酒脂粉の粹境に、三絃の微妙なるメロデーを知り、或時は又深

更傾斜の巻に金ながしを握つて俄にたる犬の如く彷徨する今日あるは、松郎兄の薰陶寔によろしきを得たりと言ふべしである。しかして松郎兄は常によき兄であつたけれども、私は決して常によき弟ではなかつた。實に懺愧に堪へない次第である。馬行君との交友も随分波瀾重疊を極めたものだ。もし、われわれ二人をプロダクションよろしく招聘して『青春ローマンス』なる題材の下に一卷の映畫をなさしむれば、正に阪妻以上の効果をお得する事疑無しである。其處へ若し浪六五人男のお島を熱愛する松郎兄を煩はせば鬼に金棒、更に妙を得て一躍映畫界にセンセーションを捲起す事請合であらう。

さもなくわれわれ三人の名優は、手にく凡ならざる個性を振りかざして、大いに嘆じ、大いに飲み、大いに突いて(七)来た。君子馬行君が痛嘆之を久しうした私のデカダン生活も、バンのために餘儀なくされた私の改悛で目出度く解決したが、此度は又情勢一變して僕が、彼の昨今を憂慮せなければならぬ様になつた。云ふのは風聞頻りに、馬行君の撞球耽溺を告げるからである。私は又此處でもざんげしなければならぬそれは私達にまつては戀しいなつかしい街の灯ではあるけれども、それを動かさず恐れてみたお坊ちゃん馬行君にあの幽婉なタングステンの明暗、青い羅紗に交錯する紅白の玉の如何にチャミングであるかを知らしめたのは、さりもなほさす僕自身であるから。

僕の藝術的良心は、莢豆君によつて喚起される場合が多い。あの純情に輝く透明な瞳、クラシツクな君の相貌に對する時、私は徒らに洒落の氣の多い世上の煩雜事のみを川柳化する事を恐れる。——眞夏のある夕まぐれ、詠嘆的な二人の詩人は、西宮の海近く、酒倉の櫃比するあたりを夢みる様な氣持で歩いてゐた。傾斜した陰影の搖曳、彼は羅馬の詩人が煩はしい文明の侵蝕を呪ふが如く、酒倉が次第にコンクリート化し、幾多の怪異を包むその櫃子窓からは、あの懐かしい酒男の鼻唄が洩れて來ようとはせず、永久にわれ／＼の現代から姿を消した事を嘆いた。二人は、莢豆君、今一人は勿論私である。いや私は詩人ではなかつた。けれども彼は恐らく詩人である。その詩人を私は又よく苦しめなければならなかつた。あまり豪奢でない詩

粒々集

○ 相元 紋太

蚊になつて間なし盟のふちへ來る
運のない奴等の中に數へられ
燐すすれば砂の續いた縁の下
飯粒のほろりさ取れた仕事服
佛より外に響へるものがなし

○ 安川久流 美

廣い野に旅人さなる風が吹き

人のボケツマネーは私によつて亂される事の度々であるから。醜い自分へ鋭いメスを下して行くさいくらでも、後から／＼と腫物が引きずり出される。此際すつかりさらけ出してしまつたらざれ丈けせい／＼するかも知れないが、限りがない。萬よし老に一方ならぬ又怪しからぬ迷惑をかけてゐる事。等々々、限りがない。でこの邊でペンを擱く事にするが、何れにしても早く出世がしたい。早く不義理を一掃してしまひたい。借金や、高い敷居なご、が堆く積重なつた私の塵箱をべん隅から隅まで綺麗に掃除すればざれ丈け愉快な事だらうか。いゝ句も出來よう、深い思索も冥想も妙に歪んだ私も自ら矯正されて、清々しいさても痛快な男になるだらうと思ふ。

停電にぬすみ心もありぬべし
地下權に訴への出る面白さ
白さいふ嘘のあるのも夏の町
錢になる虫を弟取り逃し

人間の重味を蜘蛛は知つてゐる
わが家

町内の俺に子があり太鼓鳴る

柳珍堂忌

九月三日午後七時
於端の坊

柳珍堂忌を九月三日午後六時端の坊に於て營みました。端の坊はほんこに久振りだつたので何だかなつかしい氣がいたしました。障子を開け放して涼しい庭を眺めながら句作三昧に入りました。

兼題發表後主幹が故人に就いて話されました。尙當夜故人の知人藤原游一那氏(游魚)が出席されました(二柳子記)

路郎、游魚、木人、番翁、番外、川洞、飯山、一文字、柳一、かほる、徹底郎、靜雲三斗、文久、三平、靈翠、白帆、オーイ、失名、突支坊、三笑、越村、案山子、鮎美冷笑、眠聲、一吉、青影子、山雨樓、屏三呂、久郎、彩秋、万よし、素人、莢豆、多聞、助六、ひろし、開路、放馬、雅幽、松郎、馬行、二柳子

無口(兼題)

路郎選

無口もう千日前の灯にそむき
持駒を尋ねてもこの無口なり
無口のまご伯父さんに似て
無口眼を落す蠅がつるんで
無口。按摩の世辭を五月蠅が
無口なら無口と思ふ親心
無口ですからご女房に云はれ
あんまりな無口を陰で笑ひ
聞いた事だけしか云はぬ養女
電燈をみつめて無口聞てる
佛壇で無口な嫁は泣かされる
大それた事を無口は思ひ込み

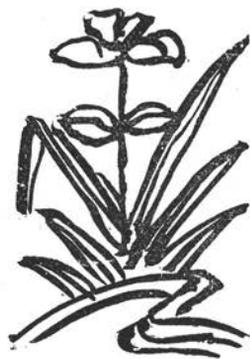
山雨樓 悟郎 助六 多聞 かほる 三笑 柳一 史一 史一 三斗 失名 案山子

あれでるて物云々知つてゐる
のど食無口のまゝで生きてゐる
謎は解けざりひごの子を生み
みな立つたあごへ無口顔
二番目の無口へ父は注ぎ込
首あけて雞魚寝の中の無口者
ものいはす池田の山の土
人並に動き無口は損をする
交換手家へ歸れば無口な子
母親の頼んで歸る無口の子
無口になるご眼の据わる兄
念佛のほかに無口の人となり
拗てるた無口よて。あつた筈

冷笑 鮎美 莢豆 松郎 馬行 游二 同 彩秋 同 ひろし 同 文久 同

無口變屈下積金もなく死に
行勢無口の洒落でけりがつき
女房の無口が母の氣に入らず
妾腹に生れた丈で無口なり
昔から槍一筋で無口なり
それごなく別れに來て無口
無口者強ひて笑へばなほ淋し
社にゐても女房さるても黙々
(軸)妻の無口へ浴衣一反
蓄音機(席題)

萬よし 同 三平 同 飯山 同 同 路郎 互選 靜雲 山雨樓 萬よし 青影子 突支坊 聞路 彩秋 多聞 憲翠 久郎 南村 久郎 冷笑 眠聲 文久 かほる



唐柳短解

蛭子省 二

(三) 味噌屋のやうな詩をつくる

曹子建

曹植字は子建、諱の人、十餘才にて文を善くした、世説に「魏の文帝嘗て東阿王(子建の事)をして七歩の詩を作らしむ成らずんば當に法に行ふべしと、即ち聲に應じ詩をつくる曰く、煮豆持作羹、漉鼓以爲汁、其在釜底、然其在釜中泣、本是同根生、相煎何太急と、帝(曹操の子也)深く慙色あり。

和漢の口豆小式部曹子建

詩は七步歌はふみ見ぬ内によみ

少式部の「大江山生野の道は遠けれき」

のいきさつは、古句にて「おこなをやり

こめた歌も定家入れ」「當意即妙見ぬ文

を娘よみ」なきがある。

口豆な小言性空聞きつける

徒然草六十九段に面白く載つて居る。

七歩の詩にまけない五歩の詩がある。唐

詩金粉「史書上書して詩を能す自薦す

云ふ子建は七歩、臣は五歩の内に明詔を

塞ぐべしと、明皇試みるに、除夕、上元

竹火籠等の詩を以てす。口に應じて出づ

上薦賞して授くるに官を以てす」。

(三三) 庖丁いたらず指を切る料理番

四十五編舟樂の句に「鳳鳥いたらす先づ

いづる煙草氣」がある。論語子罕篇「子

曰く鳳鳥至らず、河圖を出ださず、吾れ

己みなん矣夫」

(三三) 讀めぬ仕打さ腹でほす書を
そしり

郁隆七月七日、見富蒙皆曬曝衣帛、乃出
日中仰臥、人問其故、曰我曝腹中書也

(世説)

歌は顔書物は腹を日にさらし

四十五編瓦合の句であるが、上五は「白

河の名歌能因黒くなり」「能因が首たう

なすミ並んでる」等の彼の「都をばかす

みミ共にたちしかぎ」の孕歌である。

日本でも腹を日に干す小舟町

樽を傾け腹を干す小舟町

小舟町には輕節問屋が多かつた「小舟町

でもかいてゐる土佐日記の狂句がある。

(三四) 闇で切る纏はあかるい君のさく

厚い叢慮でかぶりもの皆ごられ

楚の莊王が群臣ミ會して夜飲せられた際

風のため纏忽ち消ゆ、臣下の一人列せら

れた後の御袖をひいた、后王に告げて妾

の衣を牽きし者の纏を絶ちたり、早やく

灯をこもされよと、主君は哀みの情深き

方なれば侍る人々おのゝ纏を取るべし

然る後燭を繼がれた、此の男涙をこほし

て感しくおぼれたの事である。後、戦ひに望み馬前に大功をたてた云ふ、説苑唐物語等に詳である。

(三五) 喉ふ事は老圃にしかず馬喰町 (四十一篇横好)

老圃は上手な野菜作りの意で論語子路篇に「椶遅稼を學ばんと請ふ、子曰く、吾れ老農に如かず、圃を爲るを學ばんと請ふ、曰く、吾れ老圃に如かず」

(三二) 雲長と宗祇和漢の髭おしひ (二十一篇)

曹操問ふ御邊の髭何程ぞ、關羽曰く數百根あれ共秋に至れば三五根ぬけ、冬至れば鬚々多く抜く。鬚ん事を畏れ極寒時は囊を以てつむ。次の日朝に出ける時、帝怪しんで關羽が胸の囊を垂れたるは何故ぞとお尋ね有ければ、關羽謹んで奏す、臣が髭極めて長し、丞相囊を賜りし故に包む、帝乃ち殿上に召され御覽あるに長さ腹を過ければ限なく打笑みて、眞の美髯公なりと宣ふ。

宗祇も二十五篇に「髯を惜むで迫剝に一

首よみ」の「我爲に拂子ばかりはゆるせかし塵の浮世をすてはつるまで」で、柳界を賑して呉れて居る。

錦袋は詰ま智恵さを入れておき

は勸學屋錦袋園の了翁を咏むたものであるが髯は雲長を聊か臭はした氣味なしにしない。文化時代の句である。

西洋人が日本人と支那人の區別をつけるにヒゲの有無を以てする云はれる程現代の支那人が滑面であるのは關羽の子孫

さしても其の興つた人種の系統からしても可笑い、禽獸から離れようとする文明開化の修飾上の努力だと言明した人がある。

(三七) 妾の兄知章かやうに馬に乗り (二十七篇琴我)

「妾が兄宇治へ落ちてくやうに乗り」、
「妾が兄きやたつに上るやうに乗り」、
「妾が兄お馬にのるに附木つき」「妾が兄尻馬はさて上手なり」湯文字にくるま因縁は昔も今もかはりが無い。
表掛でやつと知章を馬にのせ

飲中八仙歌「知章騎馬似乘船、眼花落井水底眠」南郭に講釋させるこ、賀知章は越の人、海邊の事になれ船には乗りつけてゐる、そこで馬に乗る事は下手、酒に酔つて馬に乗るさふらくして船に乗つた心地である。

(三八) 終南山にひすべしと通辭ひ

柳宗元文「終南西至於隴首、以隴於戎、東至於太華、以距於關」富士山を眺めての句である。

終南山

太乙近天都 連山到海隅 白雲迴望台 青鶯入看無 分野中峰變 陰晴衆壑殊 欲投入處宿 隔水回樵夫 (三九) 廬山西湖も八景に及ぶべき (七七篇)

お國自慢は古今東西を別たす人情である廬山は江西省に在る、廬山の中に居る者は廬山の全形を見ず云ふ言葉が残されてあり、李句の日照香爐生紫烟の詩は名高い、謠曲「三笑」にうたはれてゐる。西湖は浙江省に在る、十景あり、平湖秋月、蘇堤春曉、斷橋殘雪、雷峰落照、南

屏晚鐘、麴院風荷、花港鰓魚、柳浪聞鶯、三潭印月、兩峰挿雲

(四〇)二朱の臺五岳が圖ほぎ並べたて

五岳三山はものかは二十山
列子湯問篇「渤海東有壑、中有五山、一岱輿、二員嶠、三方壺、四瀛洲、五蓬萊」
封禪書「蓬萊、方丈、瀛洲、此三神山者在勃海中、蓋嘗有至者、諸仙山及不死藥在焉、其物禽獸盡白、而黃金白銀爲宮闕未至望之如雲及到三神山反居水下、隨之風輒引船而去、終無能至」
三山は三壺とも言ふ、前句は吉原の臺物、後句は不二山

▲(附記) 本稿は七月號を以て中止する
心組みなりし所柳雨翁より「川柳雜誌の唐柳短解は非常に結構、是非續編を仰ぎ升、今少しくブレインリーにお書き下さ

柳風阿呆陀羅經

やうミラ生

エー申しあげます御經の文句は、夏が来ただよ、夏けがされるよ、蛙飛び込ふよ、しぶきがあがるよ、メダカが逃げるよ小石が光るよチャカボク〜。

水音あ高いよ、陽はまだ高いよ、芥子が飛んだよ、ひばりが啼いたよ、牛屋の窓では牝のあくびよ、猫がのそのそ仔犬がちよ〜

れん事を望む」云、敬勵の御書狀を頂き
淺學盡し得ぬを恥つゝ専ら御垂示にたよ
つて禿筆を探ります。

父は子の爲めに〜で来る

忠臣藏の句、〜は虚無僧姿の形容(十
三)に論語の子路篇に依り「父は子の爲
めに」の出典は陳べた、餘談であるが假
名世説に「並河五一郎、父を並河彌右門
と云ひて丹波國並河村の人也、彌右門丹
波より山城國鳥羽村へ出て、米商ひをな
せり、五一郎、勸助兄弟未だ幼き時に、
近所の人にたのみて、四書の素讀を學ば
せけるに、或時論語の、我黨に身を直す
る者あり、云ふ章を讀むを聞いて、こ
れは怪しき事なり、子をして父の悪事を

海老がはれくり、なますがひつこむ、眞つ黒
照ノ坊替中へからけて、小鮎遊がせばカニの
念佛、シツミの御經よ、チャカボク〜。
くちなのお腹はキラ〜光つて、いたちの
近目が小首かしげて、碗豆が、やつれる、濱茶
がはじける、蒲公英あ浮かれて、ヒヨイ〜
飛び立つ、夢が熟れたよ、姉さん、冠りの手ぬ
ぐひサク〜、利鎌の切れ味、三尺手ぬぐひ
くるく〜はちまき、さんがりお〜、かぶん

あらはす事、何こして直こいふべきや、
こいひけるに、やがて次の孔子の御言葉
をききて、かく有べき筈の事也。孔子は
有がたき人也云れし彌右衛門は文官無
學の人にて、四書の素讀をまはじめて聞
くほごのひなりしかさ、その見る所かく
の如し。

七月十三日花叢子氏より大沼公園の繪葉
書を送る、駒ヶ嶽を抱擁せる大沼は相倉
周防守殿塵の跡なり、小沼濤天夜中に通り
や馬の響の音がする、未だ興を盡さず蘇峰
先生の烟霞勝遊記を繙く、島は一百四十、
灣は三十二、如何にも小松島の趣がある、
然も彼は海にして此は湖だ、小なりさ雖も
特色がある、殊に此日、秋陽直射、駒ヶ嶽
は加藤清正の片鎌槍を横へたる如き姿を
一碧の澄み渡りたる秋空に詩へて横る、詣
情自ら碧雲を衝いて上らざるを得なかつ
た、余繪葉書を机上になき涼を覺けつつ
此稿を淨書す

〜うなつて、兄貴やア、おちきと、夢かきこ
つこ、チャカボク〜。
池の蛙はささか〜さわいで、ぶく〜ひり
出す八千八匹、雀の眼玉に尾が出て遊ぶよ、
おたまじやくしがちよろ〜泳ぐよ、水が光
るよ、子子踊るよ、お太鼓たたくは入道雲か
よ、今年の夏けも豊年々々、服借て来て田植
濟ませば、兄貴の嫁御ちや、七夕祭ちや、チャ
カボク〜。 一九二六・七・七作

試
み

木村半文銭

○

「壁です——」

「突破するんだ！」

○

——人間よ——

肉眼には見へません！

さうですか——

——終——

○

——村正だ！

——無銘だ！

○ 冬の社會局

西へ西へ——

「お急ぎですネ」

「……………」

——たッ西へ——

○ マッチだ！

水だ！

○ 東京中心地帯？

○

合ひけり——

別れけり——

○ 路の人々！

○

汽車はしる——

「なむあみだぶつ」

——汽車はしる——

○

「さあ舌を！」

「その釘拔は小さかろ」

——現實——

○

天ご地ご——

良人ご妻ご——

——夜ご晝——

○ 鐘が鳴る——

「革命だ！」

「革命だ！」

——幕——

○ 一字づつ——

一枚！二枚

——原稿紙——

○

共産主義者？

——何うだ！

——何が？

眞晝也

○ 蠟燭ご線香！

おさきへ——

おさきへ——

柳路氏
に與ふ

川柳大學の句

竹馬居主人

「失念云へば立派なもの忘れ」で、此の失念が人生にどれ程幸福を寄與して呉れてるだらう。自分は病苦の失念から時に平然たる態度を持つ。川柳の失念も亦詩想を枯らさない賜になる。

「川柳大學」の出句を忘れてる内に立派な冊子が東京の友人から送られた。いたつて交際の下手な自分はアノ澤山な川柳家中何十分の一も文通がない。大家揃ひであらうが作品は玉石同架、然し快心の作を提供されたのであらうから個人を知つてゐて觀察するには都合が好い。自分は知己の分丈けを繰返し諷誦した。

あなたの頁には八句ある。

手内職切れて宵寢の久し振り
ハルピンで一人逃がした曲馬團
退校をされレーニンの著書を読み
カンバスへ木の葉が散るも野外にて
花の散る様に名妓は落籍される
子澤山バリカンを買ふ氣にもなり
次郎長を褒めて親方喫ひ付ける
酒の味も知つて出戻り淋しがり

會で感想があつたら述べるようにさお葉書を頂いてゐる、責を果すに機會を逸してはならぬ。

酒の味も知つて出戻り淋しがり

實に「も」の一字は千鈞の重みがある。若し「も」がなかつたら生活心境が單なるものになつて、追憶がない、哀愁がない、解決性を缺く乏しい背景のものになつてしまふ。或は此の酒は出戻つた實家ではなからうと觀察の動搖昏迷がある程、藝術的にも安價なる。然るに「も」の動く範圍は事件を點出する雰圍氣を非常に擴大なものとなし、燃焼をも多様なものとする酒の味も覺ゆる程の家庭を水入らずで作つたのだから、煙草の味、芝居の味等々、八八の味も知つた融け合ふた感情、それが一時的の夢の浮世の出來事であつたにしても、惡戦苦闘の人生苦から抜け出た享樂味に滲透した安神さ、靜寧さが窺はれる。

廢癪しかけた生活が遂に情的惡化を來し、お互に元の赤の他人に歸つた時、女の實家は兄の代さなつてゐた。兩親は尙ほ存命ではあるが、兄嫁が後生大事女中代りのように眞黒になつて

朝早くから働くのを見せつけられて、爰に出戻りの哀寂感孤獨感が起る。性の衝動もある。女の一生なんてつまらぬものだ。

兄嫁の日々に比し酒の味も知つたアノ放蕩な過ぎし日の雑念がむら／＼湧起して生々しさに咬られ、心の紛擾が妙に捏ねて胸に込み上げてくる「淋しがり」は果して明滅的な神経のいらだちを表現して遺憾ないであらうか。否古川柳家が不用意に慣用した所謂「淋しがり」を、其儘借りた傳統的の缺點を餘りに正直に承繼してはゐないだらうか。作者の欲した手段ではなく無關心な間に合せではないうか。でなくては餘りに説明に墮してゐる。「出戻り」なる言葉には、モウ「淋しさ」が抽象的にきこえてゐる。此の音響を句全體に籠らせてこそ態度と情緒が根強く掴み得らるゝのである。

ハルピンで一人逃がした曲馬園

此の種の句はよくある。先月であつたハルピンで淫賣を見にいつたミ云ふがあつた。ハルピンミ曲馬園、ハルピンミ淫賣、ミ云ふ連鎖關係があるだらう。多分は机上で作り上げる不純な心の運び方ではなからうか。やはりハルピンでも亦一人逃走した曲馬園の意味であつたら、中心が曲馬園に集まり、其組織性及廢頹味が驚異の眼をもつて謎のような潜在力を訴へてくるハルピンで一人逃がしたミ云ふのならハルピンに特種の魅力的地方事情が顯然たらざれば波瀾の解決しない。淫賣を見た事も何等の人間味を刺戟しない。

退校をされレーニシの著書をよくみ 子澤山バリカンを買ふ氣にもなり

川柳の三要素として軽味、穿ち、滑稽を昔は説いたものだ。全的人間性はタツタ之れ丈の要素で構成されてもるなければ、表現さるべきでもない。三要素の力説が禍を爲したののは軽味のヤマ、穿ちのヤマ、滑稽のヤマが川柳そのものであるかの如く理解されて今日でも「ヤマ」許りねらつてゐる苦勞人が可なりある。野心を捨て、己の眞心に歸る。正直な心境、昂奮の鎮壓、換言すれば詩人である事から覺醒して、虚偽の煩累から禪脱する。そこに新しい川柳が芽生へるので、内からも外からも侵さるべきでない。「ヤマ」をねろうは遊戯だ。的のみを欲して射る態度は功利である「退校ミレーニン」は叙述上のヤマがある「子澤山ミバリカン」の方が平明丈々に生活にふれてゐる。前句は殊更な心の攪亂であり後句は一個の希求である。

手内職切れて宵寝の久し振り

佳吟である。作者の手腕が充分に發揮されたもの環境に心の構わがない。利那の満足に硬化がない、技巧も手段的でない、材料も生活に織込まれてゐる。言葉も亦弛緩がない。機微の情緒が働いてゐる。残る三句は略す。
今日——大震三周年の日——五色揚ミ捏飯を家族ミかこみ追
回久しふす。東京に住まるゝあなたの作に親しむだのも意味のない事でない。

川柳書架 (二〇)

五花村 獨活

大谷 五花村 校閱
吉成 劍突坊 編輯

▲卷頭に「五花村君」(一平寫)がある。
柳樹寺 劍花坊氏の「再び獨活の序」に
編者 吉成 劍突坊氏の「獨活に就きて」
がある。

▲内容目次を挙げて見る。

- 追憶 (文三句) 歌を好く女 (句) 油氣
 - もない人生 (句) 狡猾な天下 (句) 國
 - 訛り (文三句) 淺黃幕の國から (文三
 - 句) 雄大な天地 (句) 悲喜交々いたる
 - (句) 燈臺の灯 (句) 川柳賦ん語 (文)
 - 三句) いろくんな人種 (句) 國自慢 (
 - 句) 酒善奉燈 (句) 杯へ落ちた花 (句)
 - 五花村式 (文三句) へなぶり、五錢玉
 - (句) 上方へ旅して (紀行文) あこの
 - 女 (句) 印象の女 (文三句) 藤枝行 (紀
 - 行文) 田舎の春 (句) 黄金の雨 (句)
 - 行脚僧 (句) 神風 (句) 震災火災 (句)
 - 大震記念の辭 (文)
- 右の外服部亮英氏の挿畫と著者の跋文
がある。

第六回 柳談會 漫談と雑詠

林 田 馬 行

まだ誓いだ
らう云ふの
で、第六回の
柳談會は十二
日の夕刻から
開く事にした
が、さうして
く涼しい事
この上ない。

矢つ張り鳴尾はいく。そこにはなつかし
い顔が並んでゐる。いつでもすぐ逢へる
と思つてゐる。一月位は知らぬ間に經つ
て了つてゐる。椽側の藤椅子からニユツ
ミ二本長い足を出して、紫の煙を吐いて
ゐる刀三も一月振りだ。全く嬉しい氣
がする。莊主の顔もこの頃は仲々元氣だ
『俺は死んでも死なぬ俺は魂で生きて
ゐるんだぜ』いつも斯う云はれるが、ほ
こにさうらしい。人間はいつまでも元
氣がなげりや駄目だと思ふ。莊主の横に

は松郎が稍々蒼白な顔で端然と坐つてゐ
る。聞けば風邪を引いたさうな、道理で少
し元氣がない。甲子園の比軍對慶大の野
球見物の歸りだ云ふ萬よし、ひろしの
兩君は羨ましい程健康體の持主だ、顔な
んか赤銅色をしてゐる。ちつち我々も平
均にして貰へぬものかさつくと思ふ。
その横には、こんご同人になつた眠聲と新
進の鮎美君が頻に地方の柳詠を繰つて
ゐる。この兩君がさうやら今夜の感心係
らしい。

冒頭莊主から東都伊東夜叉郎氏の計を
聞かされ一同是に哀悼の意を表し、愈々
本題に入る事にした。が話さなる三例の
如くみんな仲々まけてゐぬ。六厘坊の話
柳珍堂の話、或は青明の批評、話題はい
つか日車、半文錢氏にまで及ぶ。万よし
が半文錢氏の『みかんきんかん金の分配
』僕が『諸君ッ或日大きな龜が出て』云
ふ小康の句を引つ張り出す。賛否交々愉

快な議論であつた。處へ莊主が立つて古い寫眞を持ち出して来る。見れば大阪柳壇の極初期の寫眞で、柳珍堂、六厘坊、

日車、ひさご、ふくべ、盤木、かこく佛心病その他二三人がうつてゐる。全く珍品の寫眞だ、それにしても六厘坊と云

ふ男は意地の悪さうな顔だなと誰かツ云ふ。是には一同思はず失笑した。前々號

で半文錢氏は六厘坊の顔を河豚に譬へて居られたが、この寫眞で見ると成程領け

ぬでもない。あの顔で『葉柳』を引提げて奮闘した故人はまことに我々の想像以上

に威力があつたものであらう。最近『葉柳』を再讀した僕には殊更なつかしく

思はれた。

漫談がかなり續いてから雑吟を提出する事にした。餘り喋りすぎたので句の方は

は多小お留守になつた嫌ひはないでもないが、新進の人達の奮つて呉れられたの

が何よりも嬉しかつた。それにしても柳談會ではいつも一方の旗頭をつさめる茨

豆君が令妹重態の故を以て缺席されたのは寂しかつた。

最後に松郎君が美の作さんの髻色を一席演じて腹の皮を擦らせ十一時散會。例

の如く莊主が停留所までシャツミステ、コ姿で見送つて下さつた。

寢る子息炎母糸をつぎ糸をつぎ父さなる日の遠からず系圖見る

泣かれても僕には僕の主義があるつまらぬ事に暮れてなつかし

親が出て最後の馬鹿を見せて居り朝のうちには亭主も生けるもの多數

自殺さざまり月を見てゐる畫前にふつさ女を思ひ出し

草の凹みへ絹ハンカチが落ちてゐる顔馴染の乞食暫く辻へ來す

友達が戀しう檢温器をばさみ母の頼みあの子は運の強い星

立志傳出來さうにない事ばかり夕立は小氣味よし君が叱咤も

虫じげきま、朝さなる物案じこの主人いふても駄目にしてしまひ

天井にいつまでおさへられて生き

幕末の落首

▲大正十五年二月十一日發行、四六版一〇二頁。定價金壹圓發行兼編輯人吉成留三郎。發行所は福島縣白河町東北毎日新聞社。

▲大谷五花村氏の足跡、單に句だけでないだけに、よりさうした感じがしますローカルカラーの出た文章なごに興趣の深いものがあります。

▲虛心亭主人は、本輯のはじめに、次のやうに述べてゐる。

「右は我が國珠算の權威、早大の講師翠竹垣主人村松專之助氏が、板本を謄寫し、且つ後部數編を増補せられた所であるが、嘉永六年から明治元年に至る間の、時事に關する落首、落語、一口咄、替り唄なご、此等に關係のある史實を蒐集した、極めて興味あり實益あるものであるから、氏の快諾を得て其全部を付刷したのである。年號の下に所々西曆の搜入したる外は文字文章、總て之を原本の儘さし、些の増損をも加へなかつた、未尾五種虛心亭追録

▲本輯は柳書三云へぬかも知れぬが、時事往々なごがあるので載せておく。考證家の參考さなるべきものである。



川柳塔

○ 井上 刀三
幸福な奥様へ紅絹映ゆる
襟脚へ魂までも吸ひさられ
お前さへ笑へばわしも笑ふのだ
曲者もこの寒風に風邪をひき
あきらめてゐるたがいよくあきらめる
派手な浴衣へ舅の格氣
僕なんか眼中になかつた事を知り
言葉少なく惚れられてゐる
未亡人厚意を見せた事を悔ひ
朝まだき今日の生活が忍びよる
暫くは胸で女を弄び

百圓さ値打がついて恙なし
逆はぬ代りに糧をあてがはれ
弟凛々しく婢さんは三聞く
何事もく金持つてから
殺されるまでは女が勝つてゐた
○ 伊藤彦造
新妻のなさけ單衣がしやちこぼり
裏庭を見れば女房の禪がけ
このごろ
修羅八荒濟んで一ト息ついてゐる
○ 喜田飯山
くすりごりにやらねばならぬ子を探し

長尻さ知らず坐布圍すゝめてる
母一人養ひかねて妾に出
身賣なきせいでよかつたこゝに成り
うろたへて立てば椅子まで横に向き
前坐フト二階の夫婦者を見る
和解してみれば生れた家であり
なにごとも無かつたやうに店を開け
柿むいでやつて繼母らしうなし
助けてやれば飯もくひ酒ものみ
つり出しておいて火鉢へ手をかざし
子へ土産買うて買物仕舞なり

○ 横田眠聲

お前らの知る事でなし先へ寢な
父に似て酒を飲む子を母案じ
それしきの字も讀めぬのか中學生
つきあつて呉れさば逢ひにゆく氣らし
朝顔よ明日も早出だ留守に咲け
H.K.の手紙母をばあざむきぬ
その自殺毛生に藥が残つて居
女るなければビールはにがし
刻喫へば刻がよしさ大旦那
黄金萬能の戀はかなしく

經濟の立場もあつて麥をたべ
夕焼にお母さんも出て汽車ごつこ
箆笥あければ下駄があり女郎

○ 塚崎松郎

切れる氣で行けばお光り揚げてる
帳簿の上の算盤の影
肱ついた淋しさ硯の水揺れて
久し振り鬚に結うて見る餘裕
妻の伊達巻お富にも見ぬ

○ 麻生霞乃

氣を變へて雲は東へ流れ出し
手を通さずに浴衣をしまひ

○ 庄万よし

繁昌は兄弟バールを飲み歩き
若い引子圍われて見たい氣にもなり
明月に議論の餘地はなかりけり

かつて二三回便所掃除に來し五十男同輩を切
り今朝刑務所を出たりさて來る(二句)

傷害罪一本調子の男にて
刑務所を今朝出て來たへ茶をすゝめ

○ 三好革郎

温情は金さへ貰らや分ります

この頃は怒る元氣もありません
一錢の金さへ無いが言ひにくく
借りるより歩きますまだ歩けます
貧乏は働くこゝまゝ並行し

○ 高橋かほる

をなごしにやり込められる出前持
仲直り姐御は一羽しめさせる
逢戻りをこぜの骨がのぎに立ち
目覺しがぎうのこぎの登山服

○ 松本助六

枕許バナ、の皮をきたながり
賣りつけて矢立に水を貰うてる
賣切を出してそこらを洗うてる

○ 岩崎柳路

夜更しをして来た娘寝つかれず
派手な帯寫つて嬉し水鏡
新妻のまだ大股で歩くくせ
妾今日銀行へ行く用が出来
股ずれをしたこ女將は笑はせる
籠の鳥なきを吹いてる支那そば屋
紳士的態度で来いこいふ喧嘩
牧場に桐の木一つ景に成り

○ 林田馬行

笑顔ぬつこ出さうな窓を往きかへり
國粹へその刺青も入れておけ
ブラジルへ逃けて行くのも顔かれ
親父の癖が牛に残つてるるも秋

○ 森田輝翠

今更に生れたこぎが悲しまれ
朝つばら鮮語大きく尋ねて来

○ 黒木莢豆

寂然としたものをきく胸のたん
財布はたけばほろりこ死ねり
秋の夜の金で買へます病なる
足袋のつぎ拜みたくなる妹よ
つぎくに糊のきいてるのがまてり
蟲籠をねだりその日の晩に死に
息ひきこつた疊を留守にせじ

○ 橋本二柳子

あゝさうですか姉までが云はぬなり
うつすらこ見ねます空の星のここ
さうはかばかしくは行かぬこ醫者が云ひ
もくろみも果さず今日は死んでる
呼ばいでもよいかこ枕許で聞き
紙函が歪んだなりの土産もの

募

集

句

枕許

前田雀郎選

川柳家の戸籍調へ

□ 係 馬 行 生

(一)姓名 (二)雅號 (三)別號 (四)現住所
(五)生年月日 (六)職業 (七)好きな句 (八)好きなタイプの女 (九)自信の句 (一〇)川柳以外の趣味 (一一)配遇者の有無 (一二)嫁ひなもの (一三)川柳に手を染めた年月

(一四)花 岡 百 樹

(一)花岡茂三郎(父の名を襲ひて) (二)百樹(幼名を其儘) (三)澁巴堂(始め、巴堂、大阪に移住してより澁字を冠す) 又あるぶすのやまへ、白髪夜叉(四)長野縣上田市鍛冶町(五)明治十年十二月十八日生(六)銀行員(七)あしたでも刺つて呉れろ(八)飛車がなり(古句)身賣駕籠母は寢床で伸び上り(種彦)タイノミツヅを英語かききく(久良岐)(八)水際のたつ様なのでなく、ほんやりさふつくりさした、然も身嗜みのきりくさしたもの(九)「曲馬師の年増頬紅濃過ぎたり」近詠(一〇)書籍蒐集、美術品を観る(一一)稀には俳句をやる(一二)有(一三)ませた女の子、青い背の魚、浪花節(一四)明治二十九年一月かき記憶せり

(一五)楓 林

(一)堀林兵衛(二)楓林(三)和樂亭(四)和歌山縣西牟婁郡田邊町大字今福町一番地(五)明治十年十月八日生(六)卅年間

枕許母は能書讀み直し 不減
親類が引受けて行く 枕許 案山子
枕許女將は鍵をはなさない 普天
腹屏風からが晝寢の枕許 光路
誰か来て座つたらしい枕許 杏三
患つて繪草紙殖ゆる枕許 柳秀
氣がついて俄にさがす枕許 千鳥
酔醒めの水へ枕が突き當り 濁水
枕許だけが知つてる寒い風 一路
逢狀をもう一度讀む枕許 聞路
枕許看護の人も夢を見る ひでを
全快に近く綺麗な枕許 其象
枕許も少し冷す乳の湯氣 柳也
枕許しめて仲居は洒落に馴れ 三笑
背囊の枕の下で虫が嗜き 天花
枕許一匹の蚊が通りすぎ 曉龍
枕許あくびをするこ煙草盆乃ん氣坊
こほろぎが來て朝になる枕許 万よし

枕許たゞ水菓子を見るばかり 利劍坊
頭痛醫はけて落ちてる枕許 山月
枕許安心をしてもまた睡り ゆづらん坊
親類が座り切れない枕許 大忍子
お見舞を派手に並べる枕許 拔天
枕許落籍されてから淋しすぎ 眠聲
叱られに行く父親の枕許 のほる
枕許不運の譯を聞かされる 鮎美
(五) 客
枕許衣桁はこけぬだけを掛け 万よし
中學の次男突つ立つ枕許 殘紅
枕許ペンミノートを置いただけ 大夢子
銀紙が丸められてる枕許 聞路
お袋が愚痴云ひに來る枕許 志郎
(人)枕許お粥だん／＼冷ま行き 眠聲
(地)紙入れを自由にしてる枕許 山月
(天)枕許何か云ひ度い顔を見る 杏三

商人

商人の強み有る可き物があり 柳也
 山ッ氣の長男店に落ち着かず 利劍坊
 商人は道で逢つても愛想よく 柳造
 商人の話 損徳許りなり 志郎
 商人はつまりませんを繰り返し 惣坊
 商人が嫌ひ別れて嫁を持ち 眠聲
 商人が將棋一番は暇な ひでを
 商人に成つてお妾水を撒き 不滅
 商人が逢へば忙しいか尋ね のほろ
 商人の遊山と汽車に乗合せ 殘紅
 本町筋手もちぶさたの多いこ 曉龍
 商人になる氣のベタル踏居る 光路
 しんげんは算盤持つた一人だけ 一夢子
 特價品なき、商人拔目なし 笛呂
 不景氣を知らぬが如く店を張り 同
 洋服に馴れて商人如才なし 其象
 商人の夢にやつぱり金のこ 同
 よもやさは商人風になりすまし 案山子
 不景氣だなき商人乗り合し 同
 冗談を云うて商人歸るなり 聞路
 商人のしやべつた程に儲からず 同
 公休日さへ働かせ儲けたり 拔天

相元紋太選

風呂敷を解いて路傍で店を出し 同
 滿鮮へまで商うて厚司がけ 万よし
 夜店まで落ちぶれた儘死んじま 同
 商人になつて先生若う見ぬ 普天
 休職へさすが商人怒らない 同
 商人はまだその外に金を貸し 一路
 商人の慾は鳴尾へやつて来る 同
 商人はそれより安い柄を見せ 山月
 物賣は障子もあけず斷わられ 同
 商人に仕上げて呉伯父へ遣り 無心
 値切られて丁稚帳場を振り返り 同
 商人にもつて来いだき氣質ほめ 千鳥
 角帯をかつちり縮めたその姿 同
 商賣に少しは無駄な世辭も云ひ 柳秀
 ぢぢらでも利く様に云ふ藥賣り 同
 是れ以上損は出来ぬと賣つける 天花
 耳へはさんだ筆も商人 同
 氷屋の世辭を聞く日の暑い事 同
 お得意へ白狀をして安く賣り 濁水
 新聞を見て買占めの氣が鈍り 同
 商用の往きに參宮線へ乗り 同
 うまいこ云ふ番頭で値切れず 鮎美

の印刷業を捨て病後静養してゐます(七)
 澤山あります其内の古句(母親はもつた
 いないがだましよい)(八)白粉氣のない
 姿のよい仇つほい女(九)自信の句云ふ
 より明治三十八年「下も云ふ」云い柳誌に
 始めて投句して活字になりました内の一
 句をお笑ひ草に「寢乍らの挨拶が言譯
 し」(一〇)晚酌(一一)糟糠の妻と死別し
 後妻云ふものに惱まされてゐます(一二)
 澤庵(一三)明治三十八年柳樽寺發行
 の「川柳」誌購讀の時より。

(一〇) 石井突支坊

(一)石井秀四郎(致二郎)は姓名學の和
 稱(二)目下氣に人らぬ乍ら突支坊(三)益
 鼓、又塘(俳句)聚城(論曲)(四)尼ヶ崎
 市外杭瀬の陋居(五)明治十五年十一月二
 十八日(六)會社員(敢て事務員と稱せ
 ず)(七)一向き變へて蜻蛉は樂な風に乘
 り(八)義矢滿(九)木下の世話女房風の女
 (九)ありはありだが「それが自信の句か」
 杯と擲捨されるミ業腹ゆへ發表は躊躇す
 (一〇)俳句、論曲、撞球、將棋、何れも
 堂に入らざる自信を有す(一一)有、但タ
 イブは理想と矛盾す(一二)チヨイ成金の
 自己宣傳(一三)曾(一四)大正元年頃地方
 新聞にて同時に天、人二位を占め當時乘
 氣になりしも爾來中絶十二年頃の大毎句
 會が復活

もう丁稚符喋で藏へぎなるなり 同
 番頭の手を借りずこも親且那 同
 思給を商賣人にうらやまれ 飯山
 ある時は商品の位置變へて見る 同
 息子には商賣させぬ腹で居る 同

寢 臺

寢臺に眠つた手から本が落ち 三次
 寢臺を起きて御成りに咽ぶ也 案山子
 食堂車出て寢臺へ千鳥足 芳香子
 未だ起きてるらしい寢臺音をたて 笛呂
 寢臺からひよごり越に蚤はごび 柳也
 寢臺は今の號外待ちかねる 不滅
 黙禱に寝る寢臺を淋しがり 冷笑
 バンガロー寢臺で一間おつぶさ 柚蘭坊
 寢臺の隅から下がる緋しごき 乃ん氣坊
 看柄の妻寢臺に子を這はし 濁水
 紅封筒寢臺の下にそつご入れ 呑月
 寢臺に残して有るは讀み古し 突支坊
 入隊の晩寢臺は寢臺寝つかれず 千鳥
 寢臺の寢顔にボーイたちごまり 聞路
 春秋を寢臺で迎ふ荷になる子 緋沙子
 義理で來る見舞ベツトに近寄る 天花

人出斗りに商人の腹を立て 同
 (人)損の事で商人らしうなり 汀柳
 (地)我店へ役所の電話一寸借り 飯山
 (天)名刺斗り減つてこの頃儲け 同

駒井美の作選

千仞の谷へ寢臺の夢が落ち 残紅
 あきらめた寢臺へ今日も降り かのほる
 寢臺の下に附添丸くねる 無心
 寢臺を一つへだて、大いびき 普天
 寢臺へエレベーターの朝の音 憲翠
 いろくの菓子寢臺に積れたり 汀柳
 しぎけない夫人に出逢ふ寢臺車 久郎
 寢臺を降りるさ靴が見當らず 三平
 寢臺の窓へ遙かに浪の音 眠聲
 寢臺車氣味よく夢がゆれて着き 志郎
 鉢の百合寢臺の方へ向けられる 天花
 寢臺へ雲雀の聲が耳にたち 柳秀
 別荘へ先づ寢臺の置れたり 彩秋
 寢臺に何やら頼りない毛布 大夢
 寢臺をぐるりと廻る程治り 光路
 寢臺に女海灘の浪が荒れ 山月

(108) 中澤 濁水

(一)中澤春城(二)濁水(三)碌々庵(四)高知市本與力町(五)明治十四年九月十二日生(六)高知縣農務課土佐郡農會、産業組合中央會高知支會土佐郡部會、土佐郡畜産組合、土佐郡園藝組合聯合會、土佐郡養蠶組合聯合會幹事(七)「心中の邪魔して今も禮を受け」(八)複せ型で無くさつぱりした氣の廢物を整へて脱ぐ女(九)「影法師俺より先へ橋を越し」(一〇)魚釣ま芝居(一一)缺員(一二)共存の意義を忘れて居る愚な人間(一三)大正十三年九月神戸新聞へ投句二十三日新聞地で川柳ふさころ手さ他一冊を求めた(此日が柳翁の忌日である事を最近知つた)是を讀んで川柳は「大ちゃんば山が見たり隠れたり」位のものでない事が判りかけた。翌年二月神戸新聞社の川柳講演會で互選に抜けて有頂天になり翌日川柳雜誌社の端の坊句會へ「草鞋」の句を送り前金で註文した。同夜雪を肩して蓮興寺の「煙創立句會へ眞先に出席したが一句抜けただけで抜けぬ、失望々々、その後「疊茶」から案内狀がきて四月六日會場たる妙勝寺の障子を恐るゝ開けたのは披露最中の八時前であつた、この様なわけで川柳に手が届いた次第です。

馱舌漫語

飯山生

大の字に寝れば寢臺足が見ぬ 静雲
寢臺に並んで双見よく眠り 水滴
寢臺の晝に小猫がまるうなり 紫光
面白からずや寢臺に一人ぎり 柳一
寢臺車記者を欄にまいて降り 抜天
文化村寢臺からの電話也 鮎美
旭の上る方へ寢臺伸び上がり 其象
寢臺の夢兵隊になり切つて 万よし
寢臺の童謡退院も近し 同

寢臺の寢眞敵友だけが知り 同
寢臺で未だ寢られぬハーモニカ 助六
寢臺の人三何時しか戀さなり 同
(軸)ベットに見上りマリア笑つて居 美の作
ベットにも慣れて巴里の戀を知り 同
夜叉郎君が病氣で私が代選しましたが殆ど
回想類句が多く一人一句位な割に寛選しま
した。もつと深いものをみつめて研究して欲
しい様に思ひます。まだ此方がよいと考へた
のは大分加筆しました。

家主

森田 輝 翠 共 選
太田 朝陽

日をきつてくれる家主動かぬ 天花
お内だけです家主はやつて来る 案山子
寝めさせて家主を返す拂ひぶり 柳也
家主の娘祭の稚兒に出る ひでを
慾ご金家主は狭いごに住み濁水
三人の借り手に家主ちも迷ひ 抜天
借家中跨けてラヂオ引く家主 大夢子
隣りには閉口ですま家主去に 光路
鍛冶屋さんですかま家主不足のほる

日曜日家主へ梯子借りに行き 閑路
又寄附の事で家主へみんな寄り 眠聲
條件をつけて家主へ拂ふなり 千鳥
家賃だけ子の教育にあてゝ居る 無心
むかしからずつと家主の續いて。乃ん氣坊
セキセイを飼ふ家主ごうまが合ひ 鮎美
壁土を家主悴さねつてゐる 同
本能を仲々任せぬ家主なり 汀柳
子實が無くて家主は老けてゆく 同
女房を大家の稻荷さんへ貸し 万よし

路郎主幹や水府氏の披露は、流石に、
いたについてゐる。馬行氏のも巧であ
る。

久しぶりの端坊における我が柳珍堂
では、M氏の披露もあつたが、だいぶ難
船の模様であつた。馴れない點もあるが
今すこし、僕ら初心者がリズムを重んじ
て作句したら、披露者はよほご助かるこ
とと思ふ。

S君が郷里の呉へ飯任してから一年以
上経つ。その後杳として消息に接しな
い。

君が大阪に出張中はよく端坊の句會に
出席して、いゝ句を作つてゐた。君は決
して調子外の句を出して、披露者をなや
ませるやうなごはなかつた。ある日の

お彼岸にタワシを呉れる家主な 同
薬灰を家主は露路に危ながり 柳 秀
家主には氣儘な店子さしか見へ 同
青寫眞見せて家主は間取云ひ 山 月
電車道つくこ家主は樂しませ 同

佳

家主へも話して井戸を掘り下げ 普 天
やかましい鮮語に家主逆せて來 殘 紅
家主もう就職口を待ちきれず 利 劍 坊
(軸)六法を學んで店子いじめ 輝 翠
督促を家主司直の手を借りる 同

朝 陽 選

慾ご金家主は狭いここに住み 濁 水
三人の借手に家主ち迷ひ 拔 六
はぎを吸ひく算盤を持つ家主 大 夢 子
又家主變つて家賃探めて居る 志 郎
泣き言を聞かされ家主歸るなり 千 鳥
其の家の繁昌家主見逃がさす 無 心
青寫眞見せて家主は間取り云ひ 山 月
建て賣りの心算家主は手を入れ 同
家主よく世間の事に馴れて居る乃ん氣坊

四疊半一間を貸して家主なり 天 花
家主から聞いて着屋やつてくる 普 天
日曜日家主へ梯子借りにゆき 間 路
子が出来て家主機嫌の悪い事 曉 龍
くもの巢を拂つて家主先にたち 案 山 子
此の雨に家主又かこ眉をよせ 利 劍 坊
子に家賃持たててやれもなか呉れ 万 よ し
軒切りに家主始めて顔を出し 殘 紅
家主の一軒目立つ家を建て のほる
五六軒借家も持つて役場に出 眠 聲

佳

よく解る家主店子の昔あり 鮎 美
好景氣家主を強い者にする 柳 也
子實が無くて家主は老けてゆく 汀 柳
家主の娘祭の稚兒に出る ひでを
薬灰を家主は露路に危がり 柳 秀
名ばかりの家主金利に追われ居る のほる
甚がすきで家主時々やつて來る 眼 聲
(軸)借家の喧嘩家主へ持つてゆき 朝 陽

句會で、君くんの方ほうを一瞥いちべつするこ、君くんは頻しばしばりに指ゆびを屈かして作句さくご三昧さんまいに入いつてゐた。自じ分の完全ぜんぜんな五本ごほんの指ゆびを、さこでも、大おほ膽たんに自由じゆうに使つかふここを耻はぢなかつただけでも君くんはわらかつた。僕ぼくはその後ご、君くんほごバニチーのない川柳家せんりゅうかを見みうけない。

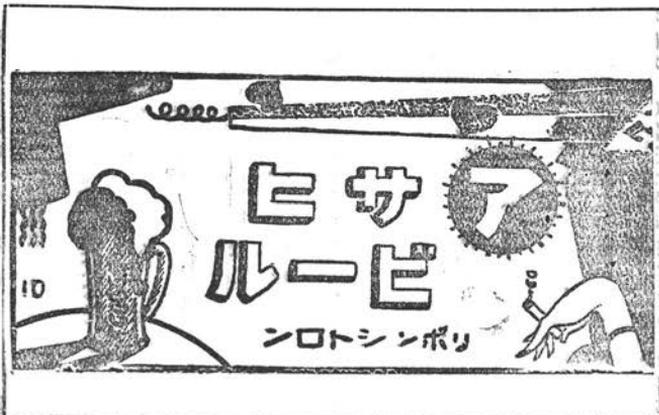
尤なほも市井しじ的な川柳せんりゅうに手てを染そめてゐて、なほ體裁ていざいに囚とらはれるここは、川柳せんりゅうの本質ほんしつにもなぞくここである。

シヤロツク・ホルムスはタイプライタイーで打うつた文字もじにさへ個性こせいを見出みだしてゐる。體裁ていざいなきに囚とらはれてゐるうちは、まだ、自じ分の個性こせいを見出みだしてゐない證しるし左であるこ思おもふ。

整ととのつたリズムで個性こせいの出でてゐる句くを出だすやうにしたら、披講ひこう者しゃを助たすけ、水府すいふ氏しや路郎ろろう主幹しゅかんを喜よろこばせる斗たりではないこ思おもふ。(九月十八日)

▲週日莊の庭には蟹がある。蟹が赤い爪を立て、静かにうごめいてゆくさまを眺めてゐる。さなんさなく可愛いものだ。私が庭に降り立つとトンボが来て靴のさきにごまらうとする。都會の埃りを呼吸して、鼻の穴を眞ッ黒にしてこゝろづかない。入途は是非一度週日莊を訪れて斯うした。興趣にひたりたまへと云つたところ果して諸君の靴のさきにごまらうとトンボが来てごまらうとするか、ごうだが、そこまでは請合へぬが、これは柳談會に來たまへさいふござださ解して貰へば間違ひはない。▼九月三日の夜、端の坊で柳珍堂忌を修した。此の夜は私が特に疲れてゐたので柳珍堂に就いてほんの少しか話さなかつた。故人を知つてゐるさいふ素人君(畫家)が出席されたのは愉快だつた。▼廿三の夜、日本橋俱樂部で柳翁忌を修した。私の選の「白足袋」を披露する前に川柳に關係のある雑話をした。▼大阪時事の渡部虹衣氏が十九日の夜、柄井川柳に就いて放送された。▼近作柳柳の花形、横田眠聲君が新に同人となつた同君の令聞は八日に長女を喜ばれた。▼永く本誌のため盡くして呉れた宮内一洲君が家事の都合で退社された。更に復活の日のあらんことを祈む。▼姪子省二氏は秋から冬へかけて持病の發作が起るので、苦しまれるさうですが本誌のためには相變らず執筆を續け

て貰つてゐる。▼花童子の令聞は、もうすつかりよくなつたさうだからお知らせしておく。▼三條東洋鬼君は四十餘日を臥床して



僅に讀書に慰められてゐるその頼りがあつた。全快を祈つてゐる。▼美の作から耳が悪くて弱つてゐるさ知らした來たかと思ふ。今度は眼が悪くて弱つてゐるさ知らして來

る。それで見舞がてら遊びに來ないかと思つて來たが、こちらにも忙しい上に、頭をいためて見舞にも行けず失敬してゐる。▼東京の伊東夜叉郎氏が九月九日午前六時に亡くなられた。美の作から夜叉郎の訃を聞いて秋を感じると云つて來た。震災前から悪かつたのであるが、病中でも本誌の選は矢張りお願してゐた。最近、選が出來ぬからお返へしします。代筆で、未選稿のまゝ送り返へされたので病態が進んだのではないかと案じてゐたが遂によくなかつた。悔むに辭が無い。選は知人美の作が代選して發表するところになつた。▲黒木英豆の令妹清美(二〇)さんが急性の肺を病んで十九日の午後十時に亡くなつた。獨身の英豆にとつては一時に母と妻を亡くしたやうなものである見舞に行つたら魂が抜けたやうになつて廣い家に一人ゐた。死の前後の種板を見せて、これでは助らない筈ださ聲をうるませた。同情するに辭がない。▼古川三次君(大阪)は三斗、岡田乃ん氣坊君(神戸)は柳道改號、岸本水府君、福助展を持つて札幌に行く。函館、札幌通信が頻りに私を羨ましがらせる。▼本誌の編輯は馬行、二柳子、飯山、刀三と私でゐる。いつも近眼鏡を光らせて編輯をやつてくれた。松郎が病氣のために出て來なかつたのは淋びじかつた。(路那生)

万よし川柳を募る(三十一回) 匾占ひ「五句、本田溪花坊選十月廿日締切、三光へ選者短冊を吾す。新成橋庄万よし宛」

社主藤堂氏の

ための悪文！

變人の古本屋である。時々お客さんに氣焔をあげて、あこであんなことを云はればモツト本が賣れたらうにさ後悔をするところなど仲々うれしいおちさんである。なんでも社會に貢獻するために本屋をはじめたのださいふてあるがさうかも知れない。大いに讀んで(大いに買つて)このおちさんを満足させて下さい。

|| 路 耶 生 ||

正に耽讀の好季節

古

本

高價に申し受けます。

御通知次第早速參上確實

迅速に御取引致します。

公立社書店

大阪市南區日本橋南詰南入

電話南 五六二番

自慢にならぬ話

花園橋万よし (花園橋西詰)

大正五年十月に私が白鷺の店を出て上かんやを始めた時横堀の社宅からよく雪の降つた冬を四十日許りも通ふて芋の切り方から教へられた師匠である。

若盛り、に今の妻君を艷種を残して伯耆倉吉から五十足らずの金を持つて大阪に着いて八千代座の横手の軒店で他人井を始め、から三十年に近い、其間小金が出来て酒屋をしては失敗しがラス屋をしては棒を折り矢張り適業は飲食店である、こゝを自覺して孜々として芋の皮をむいて御座る。

神戸福原万よし (白木屋横手)

花園橋の弟で商業へ通ふて居た頃は家庭教師まで招いて英、數を習ふたが好男子を女性が捨て、置かず、櫛橋で肉店をして居た頃は南地に深いのが出来てよく私と一緒に呑んだり、使に金を取りに越させたりした。今は六つになる男の子の父としてしつかり商賣をやつてゐます如才のない男です。

神戸湊町万よし (電氣局西)

私の従弟庄保一にやらせてゐます、保一が産聲を上げたのは田舎の私の家で彼の乳母を私の母が、大分甘く育てたものです。元町の市田寫眞館の印刷部に勤めてた時分隨憲運動が起つて新開地の交番へ煉瓦を投げ付けやうとした手を私服に握られて一日拘留せられたが未定年で許して貰ふた。道頓堀万よしに四年、柴麿に二年、もう彼れも三十である。新夫婦が今一生懸命さいふ處です。

道頓堀万よし (新戎橋)

かく申す拙者御皆權御存じの通り。

豫知醫大 石田元季先生校訂
豫科教授

西原柳雨先生著

川柳參尾志 一名川柳戰國史

定價 一圓五十錢
送料 十二錢

新刊愈々發賣

本書は川柳界の權威にして博覽の譽れ高き西原柳雨先生の近著になり曩に東京より刊行せられたる「川柳江戸歌舞伎」「川柳江戸名物」「川柳吉原志」等高評噴々として著者の文名一時に轟けるは世間の知悉する所なり著者好んで戰國の史籍を閲し血湧き肉躍る處に到れば寸鐵殺人の靈筆を以て小品的に文を傳へ附するに古川柳を以てす畫龍點睛の妙こゝに於て見るべく彼此照應して錦上花を添ふるが如し敢えて一讀を薦む。

發行所 名古屋市中區南園町一丁目 圖書刊行會

發賣所 東京市日本橋通四丁目 春

振替東京六一八四四番
電話本局三九四六番
陽堂
振替東京一六七一番

(本書は豊富に製本して居りますから御地の書店に品切の節は發行所へ直接振替にて申し込んで下さい)

投稿規定

▼句稿は別紙に認め、住所氏名を明記するべし。

▼書體はなるべく楷書「川柳雜誌原稿」に封筒に朱記するべし。

▼締切は厳守されたし。

▼各地會報は清記のこゝ。

▼用紙は半紙又は同型の野紙に限る。

▼投稿其他につき御問合せはすべて返信料封入のこゝ。

募 集

第三卷第十二號課題

十月十日締切

(各題二十句以内)

- ▼老 人 篠原春 雨選
- ▼牛 肉 矢田右大臣選
- ▼金 持 井上刀三選
西垣松雨 共選

第四卷第一號課題

十一月十日締切

(各題二十句以内)

- ▼月 末 蛭子省二選
- ▼寢 顔 塚崎松郎選
- ▼縁 談 橋本二柳子選
庄万よし 共選

每 號 募 集

- ▼近作柳傳(三十句以内) 麻生路那選
- ▼各地柳賣(會報) 塚崎松郎編
- ▼文章(評論研究吟行漫文)

社 告

社務一切(編輯に關する件、投句、購讀廣告)の用件は下記川柳雜誌社事務所宛に願ひます

價 定

一部 參拾錢(郵)
 六部 壹圓六拾錢(稅)
 十二部 參圓(共)

廣 告 料

本誌への廣告に就きましては本社へ直接御一報下さいませれば御相談に應じます。

▼御送金は掃替口座大阪七五〇五〇番へお拂込めになるのが一番確實であります▼誌代受領は送本によつて御承知願ひます▼送本封紙に前金切の印ある時は直ちに御送金を願ひます▼御希望により集金郵便を差立てます▼御不在中でも償ける様に願ひます、但集金郵便(一年分)には定價の外に手数料十錢を申し受けます▼御注文には何月號よりぞ御指額願ひます▼轉居又は改名等の節は舊新併記して御通知願ひます▼川柳雜誌に關する御用件は箇人宛にしない様

大正十五年九月廿五日印刷

大正十五年十月一日發行

第三卷第十號 (毎月一回一日發行)

編輯兼發行印刷人 麻生 幸 郎
 發行所 兵庫縣武庫郡鳴尾村字寺ノ後四四番地
 川 柳 雜 誌 社
 振替大阪三二五一四番

大阪市港區八條通二丁目十一番地

川 柳 雜 誌 社 務 所

振替大阪七五〇五〇番

賣 册 店
 (大阪) 明文堂 公立社 柳屋 岳文堂 和正堂 金城堂
 (東京) 東條 (京都) 三宅 (神戸) 米田 後藤
 (金澤) 石井 (松任) 三須 (函館) 石塚 (廣島) 金星堂

清 酒

白鶴を別荘で飲み宅で飲み
酌をする度に白鶴頂かれ
よろこびに添へて白鶴届けこき



これはねご白鶴に生きてゐる
白鶴をいつもきらさぬくらしむき
白鶴の方に幹事は極めちまひ

灘 津 攝

嘉納合名社會釀

大正十三年三月三日第三種郵便物認可 (毎月一週一日發行)
大正十五年九月二十五日印刷 大正十五年十月一日發行

第三卷 第十號 (第三十三號)

定價金參拾錢